

神様、助けて！

長谷川 乃武男

戦後五十八年経った今でも、忘れられないことがある。それは、当時の日本の軍部がアジア侵略を企て、多くの同胞を、まるで犬か猫のように扱った数々の事件である。

敗戦の年の三月。東京生まれで、東京育ちの私は、青山の第一連隊に入営する予定だったが、空襲で兵舎が丸焼けとなり、急遽、六三部隊（山梨在）に居候入営した。後で聞いた話では、此所は初年兵の取り扱いが旭川部隊と一、二を競う程厳しい所とのこと。

入営した翌朝から手荒い訓練が始まった。何の理由が無くとも、古兵の機嫌を損うと、寄つてたかつて罵倒された。あげくの果ては兵舎の入り口に正装で立たされ、一晚中捧げつつをさせられたり、宿舎の梁に押し上げられ、水を満杯にしたバケツを両手に持たされ二時間以上も不動の姿勢を取らされるなど。今なら、早速マスコミの槍玉となること間違いない。こんな生活が一カ月余り続いていた或る日のこと。突然、初年兵は甲府駅から貨車に乗せられ、横芝駅外房総に回送された。これで非人道的な生活から解放されると思つたのも束の間、今度は来る日も来る日も海岸の砂浜でタコ壺掘り。時には食糧調達のため、

近くの田園や山に行く。食糧調達と言えば聞こえが良いが、実は食糧になる蛇や蛙集めだ。もっと驚いたのは、小銃も弾も満足に無いため、軍事訓練が申し訳程度しかできなかったこと。こんな馬鹿げたこと何時まで続くのだろう。神様のことを何にも知らなかった私だったが思わず、「神様、助けて！」と叫んでいた。

一九四五年八月十五日。日本の敗戦で戦争は終わった。早速除隊した私は、着のみ着のまままで我が家へ向かった。ところが家は丸焼け、人伝てでようやく新丸子に疎開していた家族に再会。新しい生活が始まった。

二十三年後。真の救い主イエス様に出会った私は八月に洗礼を受け、神の家族に加えて頂いた。神様、感謝します。